

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈スタークウェザー書簡一訳および註〉(7)

阪上敦子 監訳
樫本尚美

書簡翻訳：前号からの続き

(今回扱う〈234〉と〈235〉の書簡は大変長文で、内容も多岐に渡っているため、本文にはないが、小見出しをつけて分かりやすくした。)

〈234〉【阪上敦子 訳】

日本の京都にて、1882年1月7日、クラーク博士宛

拝啓

〈来年度の支出金カットに動揺して2人の日本人教師の重要性を説く〉

来年度の支出金が記載されているボストンからの手紙、というより、そのコピー（最初の手紙が京都と神戸の間で紛失したため）が京都に着いたばかりです。このようなお手紙を9日の始業式直前に読んだ私たちの驚きの一端はご想像いただけると存じます。廃止とは言わないまでも、このまま行くと、女学校の基盤を私たちから取り去るということを意味します。つまり、この先駆けとなる最初の3年にも及ぶ大変な仕事のあと、やっと今始まったばかりの形ある成果をすべてなくしてしまうことになるのです。

「基盤」という言葉は、よく考えて申し上げています。というのも、日本人教師を雇い続けるために本国から送られた金額が、伝道にとって極めて重要だからです。神がお与えくださったこの教師たちは女生徒への影響という

点でも、私たちだけでなく日本人からも深い信頼を得ています。これがどれほど大切なことか、キリスト教の国ではお分かりにならないでしょうし、私も日本に来た当初は分かりませんでした。でも今では日本人教師の「価値はルビーよりも高い」ということをよく知っています。日本の若者と関わることだから、「完全な信頼」がとても重要です。京都の女学校のように、どうしても人目を引く学校では教師に信頼が得られないとしたら、ここにいる外国人はすぐにも「ブレイク・ダウン」することになるでしょう。同じ市内に男子校といっしょに「女子校」を設置するだけでも多くの人にやじられましたし、恥ずべきことに宣教師仲間からも不満がでました。私たちは批判や疑念そして「悪^{バッド・マウス}口」の炎の中に立たされて、日本人のささいな口実でそれはいつ激しい炎となって燃え上がるか分からない状態です。あなた方にはご想像できないでしょうが、ここ京都で、いつ裏切られるか分からない「日本海」の、この入り江で恐る恐る水深を測り、急に変わる風向きに帆を調整することが、不肖の働き手である私たちには計り知れないほどの大きなストレスになっているのです。

新年の試験では大きな前進があり、とても感銘を受けました。神の導きによって、これほどすばらしい学校が設立できたことは、キリスト教関係者や品性の優れた女性への記念碑となることは疑いもなく、「ニホン」のもっとも暗い片隅への灯台になるのです。そう、そして一部の宣教師には物言わぬ、あるいは雄弁な非難ともなるのです。学校のこの恵まれた特徴と定着した評判は、大部分、宮川さんや加藤さんという貴重な教師によるものですが、この新しい予算書で2人は即座に解雇されることになるのです。

〈日本人との意思疎通の難しさと宣教師たちの苦心〉

「日本人の外国人や宣教師嫌い」が今まで以上に言われています。たしかに、彼らの新しもの好きや気が変わりやすい性格を考えると、「反動がそろそろ起きる頃だ」とも言えるかもしれません。ですが、この手紙を書くまで

は、外国人流の猛進型のやり方は起伏が激しく、私たちのやり方に日本人を引っ張りすぎたのかも、という思いが募って来ていました。また日々の交流の中でも、時間をかけて賢く行動すべきだったと反省しています。神への熱い思いや至福千年²に導こうとする熱意がある私たちには、とても難しいことかもしれません。でも今は日本人にそっぽを向けさせないためには、時間をかけて行動するしかないという強い思いに至っています。

こういう訳で、ここ数年、本国から送られる金額についての全日本ミッションの方針も、次の2つのことと比べれば比べものにならないのです。すなわち、1つは日本人にクリスチャンとして成長してもらいたいのに、私たちが遠ざけられて永遠に影響を及ぼせなくなる前に、日本人に良い感情を持ってもらうにはどうすればよいかということと、もう1つは東洋的なクリスチャン流でよいから、次第に西洋の流儀に慣れてもらい、私たちを心から理解する機会をどのようにして作るかということです。

〈本国の支援者の理解を得る努力不足を後悔して日本の後進性を説明〉

今となっては遅すぎたと後悔しているのですが、頂きましたお手紙から察しますに、当地での仕事の現状や、それに伴う様々な事柄が、いかに本国の皆様には理解されていないかがよく分かり、もう少し分かっていたくためには私の役割をもっと果たすべきでした。あなた様はここ日本での「多くの悩みや苦労」に心から共感していると書いて下さっています。しかしこの手紙を読まれたあとでは、直接の伝道活動に私たちの力がどれほど不足していたか、そして2人共とても短い手紙しか送っていなかったが、それはなぜかをご理解いただけると思います。

そちらからの手紙を読んで、何人かが「クラーク博士が来て見てくださったらどんなにかいいでしょう！」と、口をそろえて言いました。というのも、他の多くのボードではすでに代表が派遣されていますので。

次に思いましたのは、歴史も古く、ずっと以前に設立された地域の報告、

おそらく年間授業料が3000ドルを超えるような「コンスタンチノーブル・ホーム」³の報告を、あなた様が考えておられるのに違いないということでした。しかしトルコでも始まったばかりで学校の規模も小さく、女子教育にめざめたばかりの時期もあったのではないのでしょうか。アメリカン・ボードによる伝道の歴史に限らなくても、「世界が始まって以来」、4年以内でそれほど厳格な「自給独立」⁴への要請は他に例がないのではありませんか。

どうして先例がないことが求められるのでしょうか。本国のクリスチャンは、19世紀という時代が性急さを求める時代なのだと言われるかもしれませんが、東洋ではまだ19世紀ではないことを忘れてはなりません。日本では今年を新しく誕生した「明治15年」と数えており、19世紀というよりも、「15世紀か、歴史に即すると16世紀」と呼んだ方が東洋や日本をよく言い表しているのです。しかし「日本でのすばらしい前進」について、あなた様が一方的で称賛にみちた記録だけ(?)を受け取っておられると、このような報告を聞くことになるとは思っておられなかったことでしょう。

<米国キリスト教徒の女子教育への惜しみない支出と支援>

特に異教の地の女学校で自給独立を提唱する人⁵は、この先が見えないときに、19世紀のクリスチャンの国アメリカ全土で同じような記録を探すのが一番いいのです。そんな人には豪華な建物を見せておけばよいのです。これらの建物は、近年ますます増えている寛大なクリスチャンの寄付によって、どの家庭にもキリスト教の恵みが行き渡っているクリスチャンの国で、女性への捧げ物として「アメリカの」娘たちのために最近建設されたものです。自給独立の提唱者には、異教の地で暗闇の真真中に2つの孤独な灯台「宮川と加藤」を建てるためのわずかなお金を、できるものなら、そしてそうしたいなら、出し惜しみさせるといいのです。

女性の永遠の名誉のために申しますが、「京都ホーム」は異教徒の女性のためにとアメリカの女性たちが考えて作り上げた成果なのです。そして祈り

と献身を基盤としてこの学校を建てた人たちは、決して寄付金の出し惜しみなどしませんし、精神的な基礎がしっかりと固まって根つくまでの短い数年間、女学校という囲いの中で、クリスチャンの生活を身につけさせるために欠かせない資金を出し渋ったりはしません。というのは、囲いの壁は数か月で建てられますが、クリスチャンの人格を育成するには何年もかかるのを忘れてはならないのです。少なくとも作品のモデルが出来上がるまでは、魂の大工や建築家を選別するにはいくら注意してもしすぎることはないし、2人を留めておくための苦労はいくらしてもしすぎることはないのです。

〈クリスチャンとしての精神生活の重要性と「自給独立」の中味の大切さ〉

私も自給独立を強く支持する者ですが、それ以上に精神的なクリスチャンの生活が大切だと思います。種まきから成長までに時間がかかりますし、地面が十分に耕されたあとで、どの国よりも奇跡的に早く日本で精神的なクリスチャンの生活が達成できるわけではありません。地面が耕されるのは喜ばしいスタートですが、自信過剰の日本人や物好きな自給独立論者は、早々と達成できたという考えに取り憑かれているのかもしれない。私たちは自給独立に向けてずっと良心的に働き、称賛に値する成功を収めてきたと信じています。もちろん支配はしても助言は求めたくないという日本人の独立心や願望がありますので、このように自給独立できることが、ここ京都で神の恵みであるかどうか非常に疑問に思えます。少なくとも神の恩寵によって必要な成長が達成される前にこのことが保証されたとしても、それが神の祝福かどうかは疑わしいのです。自給独立が成長より先だとしたら、私はむしろ別の場所で働きたいのです。「自給独立」が達成されたという漠然とした事実よりも、何が援助されるかの方がはるかに大切だと私は痛感していますので。

もちろん、バランスのとれた判断力や謙虚なクリスチャンの精神がないのに、これ以上の管理力や経営力で日本人による「自給独立」が達成されるくらいなら、私はキリスト教が広がり発展してからその日が到来することを心

から祈って待ちたいです。特に学校、とりわけキリスト教の女学校について、最も理解のある日本人でも大まかな考えしか持っていないのです。日本人の言う「支援」とは、もっともおおざっぱで、かつもっとも狭量な、そしてもっともしみわたれた方法での管理を意味すると心に留めておかねばなりません。経験豊かで年長のクリスチャンが改善案を述べる権利はもちろん、その能力が無視されるのです。洗礼を受けてクリスチャンになっているとしても、日本人は昔から自国を神々の国とみなし、叡知はこの地上で始まって終わると考えていることを忘れてはなりません。

〈キリスト教女子教育は寮での女性宣教師と生徒との共同生活から〉

世界の歴史（キリスト教を自慢している世界）を見まわしても、「男子教育」より先に女子教育に情熱をかたむけ、先に女学校を設立したいという願いがどこの国にあったのでしょうか。ここ日本でも、女学校に先んじて、他のもの、つまり教会、伝道者、新聞、男子校などへの支援が行われると考えるのが妥当ではないでしょうか。だとすれば、女子教育の自立の遅れは嘆かわしいどころか理にかなっているのです。繰り返して申しますが、日本では「支援」とは、単にそして常に「管理」の意味なのです。とすれば、女学校は新しく改宗した人々が責任を引き受ける最後の聖なる砦ではないのでしょうか。

日本における女性の地位は、キリスト教の影響の及ばないところでは、ご想像にはなれないくらい低いのです。キリスト教の感化で古い土壌を消し去るのには時間がかかります。全く当たり前のこととして、女性は男性（たとえ少年であっても）の被後見人とみなされていますし、男性は女性のとても細かいことまで驚くほど熟知しているのです。そのような状況の中で、近年の女性の日常での小さな変化をお知りになれば、私たち同様、とても喜ばれることでしょう。つまり小さな群れを集めて、精力的に女生徒を囲って守り始めたばかりですが、女性の心の中やその周りで、クリスチャンとして感化

する力のほんの小さな芽が感じられるようになりました。

この感化力を身につけるのにあてにできるのは、外国人の女性宣教師や(学校で)彼女たちに影響を受けた女生徒しかいません。日本人には、「学校」とは教室で教科書を学ぶところであって、それ以外の考えはありませんので、女学校ではその他のあらゆる価値観を教え込むのに一生懸命説き聞かせなければいけなかったのです。

職務のうちでもっとも大変で疲れる仕事であっても、実際に不可欠な部分は「学校の授業」以外の部分なのです。もし女生徒が教室での授業のためだけにここにきているなら、(授業時間数がどれほど多かったとしても)十分な教育を受けたことにはなりません。というのは、女生徒たちは寮生活でのキリスト教の家庭学習をいつも受けていないと、公立学校でのように傲慢で気取ったいやな性格になるでしょうから。幸いにも、私たちには「寮内で」の仕事を担当するだけの力が十分にあり、神様のお蔭で、今のところはいやな特徴が見られないすばらしい女生徒を与えられています。

〈通学制の大阪の女学校の現状と寄宿制の京都の女学校のちがい〉

もう1つ、このようなことを言わなければならないのはいやなことですが、大阪の女学校〔梅花女学校〕がほぼ理想的だという表面的な意見に異を唱えることをお許しください。確かにこの学校はしばしばモデルだとされています。大阪の女学校が「自給独立」に近い形で運営されているのは事実ですが、何が支援されているかを考えると、大阪の女性宣教師たちが束縛されているように、私や同僚〔パーミリー〕が学校の外で一日働く許可を政府から得ようという気にはなりません。

現在の日本人による管理(「自給独立」)では、大阪の外国人女性宣教師は校則や運営に口出しすることはできません。彼女たちが所属するステーションの学校伝道委員会はすべての案を支持していますが、報告では、学校の始業日や終業日が分からない位いつも混乱しており、組織はめちゃくちゃだと

言わざるをえませんでした。経験上、1つの部門の乱れはすべての乱れに通じます。私自身はその学校に行ったことはありませんが、これが報告の内容です。もちろん、この学校は主に通学制の学校であり、京都の寄宿学校で求められているものは、求められてもおらず、達成されてもいません。狭くて安価な設備では混乱が助長されるだけで、その上、そこでは女性宣教師たちは別の建物に住んでいるのです。

〈将来の宣教師帰国に向けて、未熟な日本人に性急に仕事をまかせる危うさ〉

痛切に感じるのは、日本人が自分たちで運営していくのにふさわしいモデル、つまり目標とする善のために私たちが願う仕事の完璧なモデルを、できるだけ早い時期に示すことが大切だということです。

どれほど少しの「外国のお金」しか日本に貸し与えられていないかを知ることが求められているのか、それとも、どんなに費用がかかっても、神の真の御言葉が確実に、そしてレバノン杉のように深く根を下ろして日本で育つことが求められているのか、どちらが目的なのでしょう。

あなた様からのお手紙には、あまり伝道活動に関わっていない他のステーションの会計係⁶の以下のような意見がみられました。つまり、「いずれは日本人に女学校の運営を引き受けてもらいたい⁷のだから、クラークソン⁷が帰国する今こそが神戸の学校を日本人に譲渡する時期だ」ということです。私には「どちらにしても、これらの女学校はいずれ（私たちの気に入るように）『経営』出来るはずだ」という考えは非常に遺憾に思えます。慎重にしなければ、学校は簡単に日本人による弱いクリスチャンの状態になってしまい、スタートから私たちのキリスト教の教えの恩恵を引き継ぐ妨げになるでしょう。そして私たちが帰国したのち、日本人がキリスト教の教えの精神を引き継ぐ可能性がなくなることは申し上げるまでもありません。

こんな例えを書いてどなたも傷つけないことを願いますが、京都で代表されるような日本人クリスチャンや、今、先頭に立っている仲間は若く、一部

は成長していても多くの点で実年齢よりも若くて幼いです。例えてみると、金持ちの父親が相続をせがむ息子に対し彼が普段「親父」をどのように遇しているか、親父に倣って後を継ぐ資格が有るか無いかによって判断するように、経験から強く感じるのは、聖書やキリスト教をここで確立するには、思慮が浅く軽率でうぬぼれが強い働き手 [日本人の若者たち] に対して、もう少し威厳を保ち、神から託された任務を急いで任せようとしなことが不可欠だということです。

本国では訓練や規律によって信頼に足る指導者や働き手を生み出してきましたが、私の見聞する限りでは、希望の星である熊本からの若者たち以外、日本人にはこのような面が全く欠けていると言っていいくらいです。熊本バンドの若者はこのような訓練を少しは受けていますが、あまりにも評判になり、ほめられすぎてもう少しで駄目になるところでした。彼らがまだ完全に駄目になっていないのは、もともと素質がいい証拠ですが、一方で、日本人は本心を隠す（第二の性質）ようによく鍛錬されているので、いつ突然、微妙な心の変化が起こるのか私たちには分からないのです。これまで私はたぶん誰にもまして日本人の長所を熱心に述べてきましたが、今は一般論として重大な欠点が気になります。しかしいずれ神のお力と時間によって克服されると思います。個々のケースでは、欠点は自分の心の中で秘かに認めるべきなのですが、多くの場合、そんなことはなされていないようです。ですから、期待されるバランスが欠けたときには、褒められすぎるとうぬぼれや頑固さ、そして虚栄心で舞い上がることにもなります。

〈頼りない若い日本人クリスチャンの現状〉

これまでこのような調子のお手紙を一度も出したことはなかったですし、きっと他の人たちも感じたままのことは一度も書いてはおられないでしょう。私たちは「あらゆることを望んでいます」¹⁸し、また望もうとしていますが、口に出すと、それは多かれ少なかれ直接戻ってくる危険性があるので、日本

人的な、あるいは一般的な遠慮は自然なことに思われます。それらについて書いたり考えたりするのはとても不愉快なことです、具体的に述べないと実際の仕事について正しくお考えいただくのは難しいでしょう。もっとも信仰の篤いクリスチャン [熊本バンドの若者たち] でさえ、たった今歩き始めたばかりの幼児のようで、ほんの一吹きでもよろけてしまいます。だから神の支配の下で許されているコントロールの利いた影響力（たとえ小さくても）を賢明に使わなければ、深刻な逆戻りが起こるかもしれません。

午前の祈祷会ではいろんな教師が交代で礼拝を行います。（時には礼拝の意図が期待しているほどには理解されていないように思えることがあります）。最近この礼拝をもっと厳密に信仰深いものにしたと発言しました。というのも、「よい教師であるはずの、あの立派な熊本バンドの青年たち」が聖書を読み飛ばして、実際のクリスチャンの生活とはかけ離れた知的な一般的な話を長々として、全体としては創造主というよりも、自らの偉大さを印象づけることがよくあるからです。私の発言に対して、「授業の前に神の御言葉そのものを読む必要はなく、それを自分のものとした上で、その精神に基づいて話せばいい」との趣旨の返事があり、驚きました。しかしながら、祈祷会を「より信仰深い」ものにしようということはすぐに賛同が得られましたので、これからは将来に望みを託して祈りたいと思います。しかし「偉大なる神の恩寵」がなければ、支援と管理は日本人の側から見ると宣教師たちが力を求めていると認識されますし、宣教師の目に見える「影響」の下では、日本人は反発を強めます。だから、実際にはそのような提案さえもしくく、またその提案は受け入れがたいものになるでしょう。そしてすぐに学校は期待されているような状態でなくなるかもしれません。それでいて、今のところはこのような人たち [熊本バンド] が最高の教師なのです。

〈再度、日本人教師の継続雇用のため、資金援助の要請〉

世界中どこでも女性のための仕事はとても遅れています。しかもその仕事

にはできるだけ急な変化がないことが求められていますので、さらに難しく細心の注意が必要です。求めている目標、つまり気品あるクリスチャン女性の育成のためには、繰り返しお願いしますが、「自給独立」の更なる動きを女学校からスタートしないで頂きたいのです。私たち全員が実践しようとする節約は、安い教師を求めることから始めませんように、それは命取りになります。寄宿料と授業料は神戸に先んじて値上げしていますが、近い将来、学校を縮小することもなく、もう少し値上げするにはどうすればよいか、注意深く見ていこうと思います（ああ、今のように十分な人数の生徒を受け入れて、お互いの熱意を引き出しながら学ぶ方がどんなにか楽なことでしょう）。新たに貧しい給費生を取らないようにしますが、この学校が「キリスト教の学校」として知られている限りは、神のみ名においてそのような賢明な使い方ができる資金が少しでもあればと、お願いいたします。

2人の日本人教師〔宮川と加藤〕は、京都の女子教育への関心を高めて、それを助長するための日本人社会を形成するのに大きな助けとなりましたが、この事業に対して日本人が神からの恵みをすべて受けるのは困りますよね。私たちのためにも少しだけは残しておいてほしいものです。そして、女学校に不可欠な2人の教師が学校のために必要である限りは、現場のステーションやミッションの判断で残れますように、そして寛大なお心を持って、男子校の教師に支払うのと同じ条件で2人の分も支給されるようお願いいたします。

〈帰国するパーミリーに代わる人材には経験が大切〉

パーミリーが自分のことを書かざるを得ない状況にあることを思うと胸が痛みます⁹。こちらに赴任する前に、健康管理について言われたことが最近ますます分かるようになりました。つまり、「毎年、年月を積み重ねることは大変なメリットだ」ということです。パーミリーには100%フルに働いて貰うことは出来ませんが、新任の女性宣教師が3人来て2年間働いても、彼

女のしている仕事はできないでしょう。ミッションの伝道の仕事も例外ではなく、個人の影響力は、その人の行いよりも人格で評価は決まるのです。また、新任の人は誰でも経験豊かな人にかなう筈はありません。ここで必要とされるのは個人の影響力と判断力で、それらは経験とその土地での交流から生まれるものですから。パーミリーの状況が変わることで、つらい試練を受けることがないように心から祈っていますし、ボールドウィン¹⁰が助けにきてくれることも切に祈っております。この便箋の余白が残り少なくなりました。この手紙の封をしてから、ジェンクス氏に連絡して用紙を支給してもらいます。これからはもっと簡潔に、そしてたびたび書くようにいたします。

以上、祈りと共にこの件をあなた様のお考えに委ねて、よりよい夜明けを待っております。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

追伸：このような乱文を二度と書かないようにいたしますのでお許しください。

1. 旧約聖書「箴言」第31章10節参照。
2. Millennium キリストが再臨してこの世を統治するという千年間。
3. アメリカン・ボードの海外女子教育伝道事業の中で、最高の成功例とみなされているトルコの女学校の名前。
4. “Self support” 「自給独立」について

N. G. クラークが幹事に就任して日本伝道が始まる頃までのアメリカン・ボードの伝道方針は、現地での「自給独立」教会の設立が第一目標であった。「自給独立」とは、「教会の運営と伝道資金を外国に頼らず、現地の信徒からの献金で賄うことと、牧師など人的資源も現地人の間から供給し、現地の教会員が教会行政と伝道の主権を持つこと」を意味した。日本伝道において、この考え方に最も忠実に従ったのが大阪ステーション（H. H. レヴィットと澤山保羅）であり、彼らは学校教育も教会事業の一環と捉え、「梅花女学校」をも「自給運営」することを目指した。しかし、他のステーション（京都や神戸）の宣教師たちの考えは必ずしもそうではなく、特に新島襄（援助受入れ派）と澤山（自給独立派）は対立していた。ちょうどこの書簡が書かれた時期の前後は、「自給独立」を巡って

京阪神の宣教師間で議論が沸騰し、結局は「自給独立」論には反対が多く、自給論者レヴィットは1881年帰国を余儀なくされた。

A. J. スタークウェザーと H. F. パーミリーは、「自給独立」論者から同志社女学校の方針に対して向けられた批判に対して、日本の状況を勘案すると、それが必ずしも第一に求められることではないと、反論しているのである。

5. 日本ミッションでは、H. H. レビットと O. H. ギューリックを指す。
6. 日本ミッションの幹事で、神戸ステーションに所属していた DeW.C. ジェンクスのこと。
7. 神戸ホームを英和女学校と改名し、校長を勤めた V. A. クラークソン。この年、体調を崩して帰国を余儀なくされていた。
8. 新約聖書「コリント人への第一の手紙」第13章 7 節参照。
9. パーミリーが彼女自身の健康上の理由と、父の病気を看病するため帰国願いを出さねばならないこと。
10. パーミリーの知り合いの Ohio 州 Hudson に住む女性で、もし役に立てるならすぐにでも来日したいとの手紙をパーミリー宛に寄越した人。京都ステーションの他のメンバーとも相談してぜひ来るようにと返事を出していた。

《244》 【樫本尚美 訳】

マサチューセッツ州ボストンにて、1882年2月17日、アリス・J・スタークウェザー宛

拝復

京都の女学校に関してとても詳しいお手紙を書いてくださって心からお礼申し上げます。ただ、あなたの健康と体力にかなりの負担をかけたのではないかと心配しています。

パーミリーさんにも手紙のお礼をお伝えください。お二人は学校の実情をはっきりと説明して下さっています。ただ、その説明に多くの時間と体力を使わずに、主だった事柄を取り上げてくださるだけで十分です。

特に、他の多くの、そして煩わしい心労に押し潰されそうになっておられるように思いますが、あなた方がそんなに力説する必要はありません。ミッションの案は、委員会からの返事がくるまでは現在の割合で支出を続けると

いうもので、非常に満足のいくものでした。

お二人の仕事が進展するように最善の援助を与えるのが全員の願いですのでご安心ください。とはいえ、できるだけ慎重に、そして節約することも願っています。そうすることで初めて私たちに託されている全ての仕事を維持し、機が熟せば拡大することもできるのです。

京都と大阪での教え方の配慮すべき点について、あなたがおっしゃったことと、したいと思われることを滞りなくする難しさについては心に留めておきます。

このような事柄をゆだねる理事会¹を設置することが望ましいと私は考えています。そうすれば、あなた方の訴えをそこへ持っていけばよいでしょう。その宣教師委員会²には、1人かそれ以上の日本人を必ず入れるべきですが、宣教師基金が使われている学校に、適切な指示を与えるのに十分な数の宣教師を有する委員会であればなりません。できるだけ早くこの問題を提起し、実現することを願っています。

とりあえずは、できる限りお二人を助けたいと願っておりますし、京都の女学校の仕事にも多大な関心をもっておりますのでご安心ください。そしてその成功とお仕事でお二人が幸せであることを祈っております。 敬具

N. G. クラーク

追伸：パーミリーさんに、彼女の友人ボールドウィンさんには日本であなたのお仲間に加わって頂き、特に学外の伝道事業に就いていただく可能性がかなり高いだろうとお伝えください。

1. Board of Trustees 京都ホームで生じている独特の問題を解決するために N. G. クラークが京都ステーションに設置を提案している委員会。スタークウェザーだけでなく、D. W. ラーネッドや M. L. ゴードン宛の書簡の中でも言及されているが、具体的な規則等は未見。
2. Board of Missionaries 理事会の別名「宣教師委員会」